



学内学会会報 第25号

「受け継ぐこと」の知恵とは

今春ご退任された中野敏子先生よりご寄稿いただきました。

中野 敏子



中野 敏子 先生

熊本を中心とした地震の拡大が収まりません。阪神・淡路、新潟県中越、東日本の震災、火山の噴火、豪雨による災害と続いています。平穩に日常生活を送ることがどんなに貴重なことであるかを突き付けられます。自然という大きな存在に対して、私たちが培った知恵は何を投げかけてきたのか考えてしまいます。

この紙面も、本来なら、学内学会の協賛をいただいた3月のシンポジウムの報告をさせていただくことでよかったのですが、いろいろ頭を過ぎることがあり、散文的に頭に浮かんだことを書かせていただくことにします。

最初の地震の速報で、これまでも調査研究を通して多くの示唆をいただいた方々のことが気になり、県の機関に勤務しておられる方に連絡をしてみました。相手の状況も配慮せず、いわば自分の「思い」の先行でしかなかったと、改めて「気に掛ける」ことの難しさを噛み締めることでもありました。配慮の無い連絡にもかかわらず返事をくださいました。返ってきたのは「公僕として今こそ働く時です」という文面でした。久しく目にしなかった「公僕」という言葉に、市民のために働く職員の数が増え、民間委譲化される中での「役所」の役割をめぐる課題を思い出しました。開催したシンポジウムでも中心的な論点の一つでした。サービスをめぐり「公・民」で分担した具体的な役割が、ひとり一人のサービス利用者にとってどのように効果を発揮するかです。ただ、「公」から「民」に機能がバラまかれただけでは協働は生まれな

しょう。「連携」と一口で言ってもそう簡単な事ではないことは明白です。そこに求められるのは、当事者と共になされる明確な方向性の共有であり、権限と責任に関する了解でしょう。しかし、誰もがじっとしては始まらないわけで、では、誰がどのように推進していくのかです。「公的サービス」が「公平・透明」という原則に基づいて動いているうちに、手間と時間が掛かっていつの間にかその顔が見えにくくなると、「自力」で生き抜くしかなくなってきそうです。「公助」「共助」「自助」と言われてきていますが、ほっておいたら、3つの中で「自助」の比重がどんどん大きくなっていく気配です。そうなったら求める「公助」も育たないのではないのでしょうか。

さて、熊本では、物資が全国から届けられているのに必要としている人に届かない。物資を仕分ける人がいない。にもかかわらず、ボランティアがなかなか入れない。収まらない地震、道路の寸断など物理的な障壁があるのはもちろんでしょう。職員の数も足りず対応できないという状況も報告されています。一方で、IT機器を利用したソフト開発などを通して、インフォーマルな情報ネットが動いていきます。

日々の暮らしを支える役割をどのように実働化させるか、まさに「他人事」では済まされないことです。これまでの経験の中から見出した「知恵」を生かせることはないか、忸怩たる思いです。

最後に、シンポジウム「相談支援実践に求められるもの—実践の継承と転換—」の報告をさせていただきます。

第I部では、戦後障害者福祉の中で「相談」がどのように形成され、今日の「相談支援」へと変化してきたかを、とくに、措置制度から利用契約制度の制度変化に見えてきた「相談」をめぐる実践での継承すべき

ことは何か、また課題を中心に報告(本学の非常勤講師の成田すみれ氏とともに)。中でも、知的障害当事者にとっての「相談」あるいは「相談支援」はどのように受け止められてきたかを明らかにすることが大きな課題として残されている点について報告(本学大学院生の坂元暁子氏)しました。第Ⅱ部では、措置制度から利用契約制度に亘って現場で相談に関わってこられた3人(札幌地域づくりネットワーク ワン・オールセンター長 大久保薫氏、大阪の相談支援事業所永寿の里かけはし 相談支援専門員の吉村明夫氏、そして、本学部卒業の練馬区立大泉障害者地域生活支援センター さくらの藤巻鉄士氏)の方々のご報告をもとに議論を進めました。制度の変化に向き合い、当事者の求めていることは何かを真摯に探りながら、寄り添う支援を組み立ててこられたことが見えてきました。その基盤に、ひとり一人のワーカーとして培ってきた「価値」の存在があることを再確認させていただきました。それは一律の実践形式に縛られているところからは生まれないことでしょう。

とくに第Ⅰ部は短時間で十分な報告となりませんでした。また、シンポジウムでは、「十分に会場とのやり取りもできず残念」というご意見もいただきました。

総会後の特別講演会

佐藤正晴先生「在外研究を終えて」に寄せて



佐藤 正晴 先生

2015年6月20日に、第25回学内学会総会が行われ、その後、佐藤正晴先生による特別講演会が開催された。佐藤正晴先生はメディア社会学を専門としておられるが、昨年度は、サバティカルを利用して、海外で研究をされたということだ。

今回は、あまり話されたことがないという、佐藤先生の明治学院大学での学部生としての4年間のお話も交え、ご自身の2回にわたるサバティカル(在外研究と特別研究)についてお話を伺っ



ただ、利用契約制度後に相談の現場に関わることになった参加者からは、「新鮮な感覚で発見があった」と受け止めていただけた部分もあり、歴史の中でしっかり伝えていくことの重要性も痛感しました。実践する人たちの力を結集する機会の提供として学内学会の活動としても継承していただけたら幸いです。

退職を目前にした3月12日、年度末の多忙の中にもかかわらず、200名を超える参加をいただきました。学内学会をはじめ学部の皆様のお力をお借りいただき無事に開催することができました。ご配慮に厚くお礼申し上げます。

土屋 翔平(社会学科4年)

岩崎 一麦(社会学科3年)

た。学生にとっても、また、講演会に参加された卒業生にとっても興味深いものであった。

佐藤正晴先生は1987年に明治学院大学社会学部社会学科に入学した。この時代はバブル期の真っ只中で、先生はベビーブーム世代だそう。ゼミは、三浦恵次先生。卒論のテーマは「社会教育とメディア」。その後、成城大学の大学院へと進学し、戦時中・占領期の日本のメディアとジャーナリズムを取り上げ、「日本が海外に発信したプロパガンダ」に関する研究をしていただいたということだ。当時は、マルチメディア論に注目が集まり、メディア史は軽視される傾向であったそう。

その後、佐藤正晴先生はバラック・クシュナー博士と出会う。バラック・クシュナー博士は日本の近現代

史の歴史学者で、佐藤正晴先生は、論文の翻訳を依頼したことを機に、共同研究へと移ることになる。

そうして明治学院大学の教員となった佐藤正晴先生は、予定より4年早く、第一回目のサバティカル（在外研究）を2005年度の1年間頂戴することになったそうだ。その際に、バラック・クシュナー博士の薦めで、アメリカのニュージャージー州に位置するプリンストン大学に滞在することになる。

プリンストン大学は、ブラウン大学、コロンビア大学、コーネル大学、ダートマス大学、ハーバード大学、ペンシルバニア大学、イエール大学を含むアイビーリーグのうちの一枚であり、アメリカで8番目に古い名門私立大学であるという。大学ランキングでは米国内ではハーバード大学とひけをとらないほどで、世界ランキングも常にトップ10に位置している大学だそうだ。全寮制の小さな大学でありながら、奨学金制度が充実しており、学部教育では数学・物理で名を轟かせている。メディア史は盛んではなかったようで、佐藤正晴先生は東洋学部にも所属して研究をなさった。

二回目のサバティカル（特別研究）は昨年、2014年度の1年間頂戴することになり、10月には海外へも出張することになったそうだ。今回は「1950年代の日本のジャーナリズム」というものをテーマにして、ケンブリッジ大学で研究をなさったという。ケンブリッジ大学はバラック・クシュナー博士が教員をやっていたこともあり、選択をされたとのことである。

ケンブリッジ大学はイギリスのケンブリッジに位置し、1209年に創立された。英語圏ではオックスフォード大学に次いで古い大学であり、イギリスの世界的名門大学である。ケンブリッジ大学では日本の近現代史の授業を聴講された。そのほかには北朝鮮問題や古典のセミナーに出席し、日本人よりも多くのことを知っているとの印象を受けられたようである。余談として、ケンブリッジ大学のカレッジ内の食堂は、檀上に教授、段下で学生が食事するというイギリス特有のスタイルをとっているそうである。

2回に及ぶサバティカルで、海外では日本からの情報発信がかなり注目されており、アジア研究の一地域として日本を捉えていることが分かったそうだ。

日本は朝鮮半島、中国とひとかたまりのアジア研究としてまとめられがちであるが、日本については唯一の被爆国であり、平和運動のリーダーになれているのか？ 少子高齢化が急速に進む中で良い福祉モデルとなりえているのか？ なども注目されているそうだ。

佐藤先生は、在外研究をすることは、日本国内から日本を学ぶことと、海外から日本について学ぶことの両立が重要であると述べられている。

現代のメディア社会は世界と密に繋がっており、日本の動向はメディアを通して世界から注目されているという。今回、佐藤先生の講演を聴いて、2015年夏のメディアを騒がせた安保法案や新国立競技場建設の件など、日々起こる日本国内でのニュースについて、これからは、世界の反応にも考慮すべきであると感じた。

2015年度 学内学会事業報告

★会報24号発行

5月20日(水) 発行部数 5,500部

★第25回総会・特別講演会・懇親会

6月20日(土) 白金校舎 本館10階 大会議場

卒業生18人、教職員6人、学生23人の計47人が参加。特別講演会は、社会学科の佐藤正晴教授の「特別研究を終えて」。

★研究発表会

11月14日(土) 発表は、ゼミ10件（社会学科ゼミ4件、福祉学科6件）。個人参加8件（社会学科1件、福祉学科0件、社会学専攻2件、福祉学専攻2件、卒業生3件）。研究発表会の参加者は、学生114人、教職員21人、卒業生38人、一般5人の計178人（発表者も含む）。今年も、3つの会場で活発な発表が行われた。

○第一分科会（1455教室）

「小諸市における住民生活と地域福祉活動の現状」

河合克義ゼミ

「農山村における地域づくりの在り方

—岩手県西和賀町の事例—」

河合克義ゼミ

「生活保護制度における就労支援の取り組みについて」

長岡綾子（社会福祉学専攻博士前期課程）

「障害児放課後デイサービスの実態と課題」

中野敏子ゼミ

「精神障害を持つ当事者と専門職の関係性について

—パートナーシップの視点から—」

井上夏子（社会福祉学専攻博士前期課程）

「社会学部の研究の歩み—社会学部設立50周年に当たって—」

丸山義王（1963年社会学科卒業）

○第二分科会（1451教室）

「恋愛関係における行動と心理過程：研究計画と中間報告」

鬼頭美江ゼミ

「鹿児島と限界集落の現状を見て」 浅川達人ゼミ
「〈こすぎの大学〉が地域において果たす役割とは何か」 坂口 緑ゼミ

「婚姻関係と親子関係」 野沢慎司ゼミ
「日本におけるステップファミリー観を探る」

奥泉悟史 (社会学科4年)
「恋愛結婚と条件—首都圏にくらす25～34歳未婚女性のインタビューから—」

府中明子 (2015年社会学専攻前期博士課程修了)
○第三分科会 (1458教室)

「社会福祉を学ぶ意義」 明石留美子ゼミ
「災害における社会福祉の役割」 明石留美子ゼミ
「大学生の災害に対する意識調査」 明石留美子ゼミ
「日本における不妊の現状について」

佐藤 舞 (社会学専攻博士前期課程)
「骨髄移植—イメージ形成の歴史に関する—考察—」

早川成子 (社会学専攻博士前期課程)
「現代の教師が有する子ども観についての社会学的分析」 石渡拓也 (2012年社会学科卒業)

★社会学部設立50周年記念パーティー

11月14日(土) 研究発表会後に、研究発表会懇親会を兼ねて、社会学部設立50周年記念パーティーを開催した。

参加者は、学長・他学部長を含む大学関係者(スタッフを含む)50人、卒業生106人、在学生119人の計275人(記帳された方の人数)。パレットゾーン2階のインナー広場を埋め尽くすほどの参加者を迎え、50周年記念を祝うことができた。

パーティーでは、来賓の鶴殿学長はじめ、他学部長の先生方、ご退職された名誉教授の先生方、そして卒業生の皆様から、お祝いのお言葉をいただいた。

アナウンサーとして活躍中の卒業生に司会進行を務めていただいた。ミュージシャンとして活躍される卒業生や学部に関わりの方々に素晴らしい音楽の演奏をしていただき、楽しく和やかな祝賀の宴となった。ベルギーレストランを運営されている卒業生からは、たくさんのベルギービールが振る舞われて大好評。徐々に旧交を温めた卒業生の方々とのお話の中に、社会学部の歴史と人の厚みを感じる時間となった。名残は尽きないが、最後にみんなで明治学院の校歌を歌ってお開きとなった。



50周年記念祝賀パーティーの様子

★社会学部・卒業生部会協賛 シンポジウム「相談支援実践に求められるもの—実践の継承と転換—」

3月12日(土) 今年度退任する社会福祉学科の中野敏子教授の最終講義として、白金校舎本館2101教室で行なわれた。参加者は、教職員26人、学生20人、一般(卒業生を含む)147人の計193人。プログラム第一部で、「調査結果の報告と問題提起」がなされ、第二部「シンポジウム『相談支援実践に求められるもの』」では、相談支援業務経験者3名による、相談支援の過去・現在に関する、実体験に基づいた情報交換・意見交換がなされた。

シンポジウム続いて、懇親会が催され、教職員12人、学生22人、一般(卒業生を含む)54人の計88人が参加。

中野先生の退職のお祝いのセレモニーが行われ、中野教授を囲んで、いつまでも歓談が続いた。

★Socially24号発行

3月12日(土) 発行部数 6,000部。

24号は、社会学部50周年記念号として発刊された。記念企画として、特集「社会学部での学び」と12人の卒業生インタビューを掲載。「社会学部での学び」には、在学生と卒業生による101篇の投稿原稿が寄せられた。



Socially24号

2015年度 学生部会・活動報告

★社会学部スポーツ大会(担当・増田和穂・菊池政志)

5月23日(土) 白金アリーナ。競技参加は7チーム、競技参加者は34人、運営の学生委員17人の計51人。

障害物競走、ドッジボールの2種目で競技。横浜校舎での戸塚祭りと日程が重なってしまった影響で、参加者数は少なかったが、土曜日の午後、汗を流して楽しむことができた。

★社会学科ゼミサロン(担当 塩崎礼奈・井ノ上真莉

亜・岩崎一麦)

10月12日(月)～16日(金) 白金校舎。5日間でのゼミサロン参加者(各ブース立ち寄りの学生数・延べ人数)は、2年生85人、3年ゼミ生175人。参加者からは好評だった。

★社会福祉学科卒業生と在校生の交流会(担当 西片翼・須貝昂太)

11月7日(土) 白金校舎。今年度で3回目の福祉企画。福祉現場で働く卒業生を招いて、在校生との交流を図るもので、今回は9分野から卒業生が参加。参加者は、卒業生25人、在校生25人、運営の学生委員17人。交流会後の茶話会では、和やかな中にも、福祉現場についての真摯な経験談や質問が交わされ、卒業生と学生の親睦が深まり、好評だった。

★社会福祉学科1年生コースガイダンス(担当 川崎太郎)

11月9日(月) 横浜校舎。参加者は、1年生40人、運営の学生委員6人。今年も、横浜教務課の担当者に立ち合っていたいただき、教務課と連携して企画を進めた。参加者は少なかったが、コース選択に悩む1年生から、たくさんの質問が寄せられた。

★上映会「うまれる ずっと、いっしょ。」(担当 深澤純・西片翼・塩崎礼奈・池田沙織)

12月7日(月) 白金校舎。参加者は95人(運営委員16人を含む)。さまざまな家族の形が描かれた映画に、時折、涙を流す学生の姿も見かけられた。

異動・消息

2016年3月 社会福祉学科の中野敏子教授が退任。
2016年4月 社会学科に安井大輔先生が着任。
社会福祉学科には、金成垣先生と高倉誠一先生が着任。

学内学会 新体制

会長	北川 清一 (社会学部長・社会福祉学科教授)
副会長(主任)	岡本多喜子(社会福祉学科教授)
副会長	柘植あづみ (研究所所長・社会学科教授)
編集担当	野沢 慎司(社会学科教授)
企画担当	佐藤 正晴(社会学科教授)
会計担当	岡 伸一(社会福祉学科教授)
卒業生部会委員長	竹村 祥(1972年卒業)
学生部会委員長	塩崎 礼奈(社会学科3年)

2016年度 学内学会活動予定

- 4月1日(金) 新入生ガイダンスで広報(白金校舎)
- 5月20日(金) 会報25号発行
- 5月25日(水) 第1回合同役員会議
- 5月28日(土) 社会学部スポーツ大会
- 6月18日(土) 第26回総会・記念講演会・懇親会
- 9月上旬 学生会夏合宿
- 10月上旬 社会学科ゼミサロン
- 11月中旬 社会福祉学科1年生コースガイダンス
- 11月中旬 社会福祉学科卒業生と在校生の交流会
- 11月中旬 社会学部研究発表会
- 2月中旬 第2回合同役員会議
- 3月上旬 卒業生部会主催「春の講演会」(予定)
- 3月中旬 Socially25号発行

編集後記

会報25号をお届けします。今年の会報は、今春に退任された、社会福祉学科の中野敏子先生による寄稿文と、昨年度総会後の、社会学科の佐藤正晴先生による特別講演会の報告文を掲載しました。会報発行にあたり、ご協力をいただいた方々に、この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

今年度も、学内学会は様々な活動を企画しております。皆様の温かいご支援とご協力のほどを、よろしくお願い致します。

(学生会編集担当 社会福祉学科3年 森合沙也花)

お知らせ

社会福祉学科卒業生からの国家資格についての問合せは、学内学会事務局が、メールまたはファックスで受け付けます。後日、社会福祉学科に問合せ、わかる範囲で回答いたします。

連絡先：〒108-8636 港区白金台1-2-37
明治学院大学社会学部附属研究所内
明治学院大学社会学・社会福祉学会
E-mail shakaimg@soc.meijigakuin.ac.jp
会費振込先：郵便振込 00170 - 5 - 96903
明治学院大学社会学・社会福祉学会

※住所変更の際はハガキ又はメールでご連絡下さい。

第26回総会・講演会のお知らせ

今回、総会後に開催される講演会の講師は、社会福祉学科の深谷美枝教授です。

スピリチュアルケアとは、主として死に直面した人たちの心に寄り添い、支えるケアのことです。日本ではキリスト教系病院で始まりましたが、東日本大震災を機に仏教の僧侶を中心に取組まれるようになってきました。

本講演会では前半スピリチュアルケアの内容や現在の動向を概観しながら、後半で、現在も聖路加国際病院チャプレンとして、がん末期の患者さんたちと日々向かい合っている柴田実さん(本学研究員)をお迎えして、印象的な患者さんたちの事例を語っていただきたいと思います。講演者はお二人とも、日本スピリチュアルケア学会認定のスピリチュアルケアのスーパーバイザーでもあります。多くの方々のご参加をお待ちしております。

日時：2016年6月18日(土)
14時30分(受付開始14時)
会場：明治学院大学 白金校舎
2号館1階 2202教室

1. 総会 14時30分～15時15分
議題：(1) 会長挨拶
(2) 議長選出
(3) 2016年度学会役員について
(4) 2015年度活動報告および決算報告
(5) 2016年度事業計画および予算
(6) その他
2. 講演会 15時30分～17時
講演者 深谷美枝教授(社会福祉学科)
講演テーマ 「スピリチュアルケア ―死に直面した人たちの心を支える―」
3. 懇親会 17時15分～18時30分
(会場はパレットゾーン1階ダイニングルーム奥)